Seven　days

＊真央＊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｖｅｎ　ｄａｙｓ

【Ｎコード】
Ｎ６５７５Ｚ

【作者名】
＊真央＊

【あらすじ】

優しく微笑まないで。
もうこれ以上・・・侵入しないで、私の心に。

蘇る恋心は止められない。（前書き）

恋愛の連載は難しいけど
頑張って練ってみます（笑）

蘇る恋心は止められない。

「慧兄！？」

私の高校に教育実習生としてやってきたのは
久しぶりにみた幼馴染みのお兄ちゃんだった。

「莉那！？久しぶりだなっ♪」

笑顔であなたは私に近づく。
優しく壊れ物を扱うように
期待をさせるかのようにまた触れてくる。

せっかく昔の恋心を消したのに
また私の心にいすわるの・・・？

冬野（とうの）　慧眞（けいま）［２１］

×

早瀬（はやせ）　莉那（りな）［17］

知ってる？
前は幼馴染みだからよかったけど
今はあなたは仮にも先生だよ？

だからもう・・・
これ以上は近づかないで、私に。私の心に。

蘇る恋心は止められない。（後書き）

どーでしたか？（笑）

私は日だまりの中で。（前書き）

あは、なんかほのぼのしてます（笑）

私は日だまりの中で。

高校２年も少し慣れたこの頃。

「今日は教育実習生を紹介するから講堂に集まれ。」

担任からの声かけで私達２－Ａはぞろぞろと
動き出す。

「ねぇね！かっこいい先生いたらいいよねぇー♪」

私の隣できらきらと目をさせながら
話しているのは高１からのお友達、花森（はなもり）　香菜（かな）。

「確かにね。」

あんまりいないと思うけどなぁ・・・。

私は密かにそう思う。

なかなかいないもんだと・・・。

香奈と話しながら講堂につくと
みんななんだか騒がしい。

「どうしたの？」

私がクラスメイトの男子に尋ねると
なんだか少し照れながらぼそっと言った。

「なんか、イケメンの先生がくんだってさ・・・／／／」

「そうなんだ♪ありがとうっ。」

私は一言だけ言うと香奈に伝えに行った。

「イケメンの先生が来るんだってー。」

「ほぅ。それは気になるな♪」

そういって用意してある椅子に座る。

「そろそろかな・・・？？」

香奈はすごく楽しみにしてるようで
なんだかそわそわしている。

「あ、あー。各自椅子に座れー。」

その号令によりみんな座っていく。

「今日は教育実習生を紹介するー。」

マイク越しから声は聞こえているのだけど
今の私には難しかった。

眠いなぁ～・・・。

昨日勉強しすぎちゃったかなぁ～・・・・。

「ちょっと莉那！？」

小声で香奈は私を起こしてくれてる・・・んだけど

私は睡魔に勝てるわけもなく・・・

すぅ～すぅ～・・・。

私はすやすやと寝ていた。

そこでまさか重要人物がいるとも知らずに。

私は日だまりの中で。（後書き）

どーでしたか？（笑）

消えていた思い出は鮮やかに蘇る。（前書き）

過去編です（笑）

消えていた思い出は鮮やかに蘇る。

「ちょっ！！莉那！！起きて！！」

「ふぁ！？」

「ふぁ！？じゃない！！教室に戻るよ？」

「あ、うん。」

ぱっと起きる。

うーん・・・ 随分寝てしまった。

みんなが講堂から出ていく。

「私達も行くよ。」

「うん。」

少し日だまりの余韻を残したまま、
のそのそと歩きだした。

＊　＊　＊

クラスに戻り席に着く。

「あ、そだ。イケメンだよ♪」

「え？何が・・・？」

何のことだろう。

「え・・・。教育実習生だよ！」

「あ・・・いたね、そーいえば。」

「そーいえばって・・・。」

呆れてものも言えないようだ。

だって興味ないんだもん・・・。

一応彼氏だっているし・・・。

「ほんと、恋愛に興味ないよねぇー・・・。」

「そ、そんなことないよ！」

「いいじゃん。莉那はさー・・・。」

何もよくないのに・・・。

「どこが・・・。」

「すべて。顔もよければ頭もいい。
そして天然、ドジっ子。」

すべて私ではない気が・・・。

「何の妄想・・・？」

「妄想じゃなくて莉那そのものだけどね・・・。」

「？」

よくわからないなぁ。

「はい！よく聞け！」

担任が大声で声をあげる。

「教育実習生を紹介する。入ってこい。」

そういって2人の男がはいってくる。

ん・・・？

なんか見たことのある男の人がいた。

・・・・誰だっけ・・・・。

「自己紹介してくれ。」

「はーい。冬野慧眞です。」

明るい声が教室に響く。

と・・・うの・・・けい・・・ま・・・？

「慧兄！？」

私は声をあげる。

「莉那！？久しぶりだなっ♪」

前とは変わらない
優しくてあたたかい笑みを私に向ける。

「・・・久しぶり。」

ぎこちない笑みをつくる。

「お？知り合いか？」

担任は不思議そうに尋ねる。

「はいっ！昔の幼馴染みですよ。」

あははって笑いながらも先生に話す慧兄。

そして次の先生が名前を言う。

「俺は桐谷（きりたに）栄人（えいと）。よろしく。」

黒髪でメガネをかけてて
明るい声色の桐谷先生をみて昔の慧兄を思い出した。

・・・慧兄。

それは私の初恋。
そして元彼氏。

あの時の優しい慧兄は私の憧れで
同時に惹かれていった。

でも・・・
やっぱり駄目だったんだよ。

慧兄と付き合うなんて。

――――――――――――15歳、秋。

「慧兄？」

「あ、莉那！来たぞ。」

そこにいたのはいつもと違う慧兄だった。

「く、黒髪っ！？」

「そう♪似合うっしょ？」

いつも茶髪だった髪は見事に真っ黒になっていた。

「ど、どうしたの！？」

「ん？まぁ気分転換。」

「適当だね。」

少し呆れて笑う。

そんな会話をして喜んでた私だった。

あのときまでは。

消えていた思い出は鮮やかに蘇る。（後書き）

難しい（笑）

恋愛の小説は設定が困難だぁぁぁぁぁ（（（（ｒｙ

恋は雪と一緒に溶けてなくなる。（前書き）

過去編の少しシリアスなとこです（笑）

恋は雪と一緒に溶けてなくなる。

冬になった頃には私達は恋人になっていた。

そこから呼び方は変わり
慧兄から慧眞になった。

「慧眞ー。」

「んー？」

「だーいすき♪／／／」

「照れるなら言わなきゃいいのに（笑）」

なんて笑いあえるくらい
うまくいってると思ってた。

でも
それは私だけだったみたいだね・・・。

「そろそろ受験だなー・・・。」
「ほんとー・・・。
あと一カ月しかないよー・・・。」

そう、私は高校受験するために
勉強を教えてもらってたんだ。

大学1回生の慧兄に。

二人ともまだ学生で
心は未熟で・・・
だから余計に付き合っちゃいけなかった。

「え・・・なんて・・・？」

「・・・別れよう・・・。」

「・・・な、何を言ってるの・・・？」

「別れようって言ったんだ。」

そう
きりだされたのは寒い朝だった。

私の頭はまだ現実が読みとれなくて
何をいってるのか全然わからなかった。

でも確かに聞こえた”別れよう”の言葉。

「な、なんで・・・・。」

「疲れたんだよ。子供のお守は。」

子供のお守・・・？

そんな風に私のことを
思ってたの・・・？

それは年下だから・・・？
私が年下だからいけなかったのかな・・・？

頬に1粒の涙がつたる。

「あ、はは。冗談でしょ・・・？」

私は精一杯の笑顔をみせていた。
慧兄と別れるのが嫌で・・・。

「冗談じゃない。じゃあ・・・ そうゆうことだから。」

そういって慧兄は私の前から去っていく。

「慧眞・・・？な・・・ んで・・・？」

懸命に手を伸ばすけど掴んでも掴んでも
掴めるのはただの空で。

私の恋はちらちらと降る雪と共に
儚く消え去った。

恋は雪と一緒に溶けてなくなる。（後書き）

振られましたねー。
さて次は過去編の最後かなー？？

心の鍵は絶対に渡さない。（前書き）

サブタイトル意味不明（笑）

心の鍵は絶対に渡さない。

そう言われたきり私の前に
慧兄が現れることはなかった。

そんなことがあってからか
私は第一志望の高校を落ちて
第二志望の高校、山野城（やまのしろ）高校に行くことになった。

私の人生の歯車を狂わせたのは
慧兄そのものなんだよ。

だから
あの日以来決めたんだ。

もし慧兄とまた出会ったとしても
絶対に恋しないって。

心に強く決意したんだ。

だから私は
慧兄に、恋をしない。

何があっても・・・。

あの時見せてくれた
優しい笑み、明るい笑顔。
あの時言ってくれた
「好き」や「愛してる」。

すべて
胸の奥に閉じ込めるよ。
鍵を厳重にかけて。

慧兄には触れさせない。

絶対に開いてなんかやらない。

心の鍵は絶対に渡さない。（後書き）

疲れるね（笑）

嫌いな君からは目を逸らす。（前書き）

さてさて現実に
戻ってきた莉那さん。

嫌いな君からは目を逸らす。

授業を聞きながら昔のことを
思い出しすぎたかな・・・。

少し溜息をつく。

私は慧兄を忘れるために高1から
彼氏をつくった。

優しくて明るくて
私をあたたかく包み込む彼氏。

天城（あまぎ）　真紘（まひろ）。

同じクラスメイトでかつては友達だった男子。

私を暗闇から救ってくれた人。

真紘は私を捨てたりなんかしない。

トサっと紙が飛んでくる。

不思議に思ってみてみると
真紘からだった。

”この後、教育実習生の授業だから
飽きそうだしぬけない？”

と書いてあった。

確かこの授業の後は
慧兄の数学の授業だったはずだし・・・。

”いいよー♪”

とだけ書く。

別にサボったからといって
テストがヤバくなるわけじゃない。

私も真紘も学年１０位以内に
入ってるし。

それに慧兄の授業は聞きたくないし
みたくない。

極力避けていたい。

もう嫌だから。

・・・嫌いだから。

嫌いな君からは目を逸らす。（後書き）

莉那も真紘も頭いいね（笑）
羨ましい（笑）

頭から離れない君。（前書き）

遅くなりましたっ！！

頭から離れない君。

「真紘ー。」

「おっ来たな♪」

「あったりまえ♪だってさっき約束したじゃん。」

「だなっ♪」

そうだよ、真紘は慧兄とは違うの。

まるで自分に言い聞かせるように心の中で呟く。

「そういえば、いつもなら莉那は
数学が好きだからサボらなかったのにいいの？」
「ん？いいの、だって所詮は教育実習生でしょ？」
「あぁ、知り合いなんだっけ？冬野先せ「ねぇ・・・。」」

「抱きしめて・・・？」

私は真紘の口から
慧兄の話がでてくるのが嫌で
思ってもいない感情を口にだす。

「ん／／／今日は積極的？」
「・・・そんなことないよ。」

積極的じゃなくてただ嫌だっただけ。
真紘との時間を邪魔されたくなかった。

慧兄なんかに・・・。

頭から離れない君。（後書き）

あはは（笑）

慧兄”なんかに”って言っちゃいましたね（笑）

嘘の微笑みは私の仮面。（前書き）

なんか・・・恋愛っぽくなった？

嘘の微笑みは私の仮面。

こつんこつんと靴音がする。

先生かな・・・？

・・・？

私達がいるあまり使われていない教室の
窓から顔をのぞかせる。

私の目に映ったのはいるはずのない人だった。

慧兄・・・。

授業中じゃあ・・・。

あ、こっちくる・・・！！

「真紘！ちょっとこっち来て！」

小声で呼ぶ。

「ん？」

少し影のところへ隠れて私は静かに
真紘にキスをする。

「莉那？／／／」

「しーっ・・・。」

何回も何回も口を重ねる。
まるで慧兄の存在を忘れるかのように。

ガラガラと教室の扉が開く。

「・・・。」

静かに慧兄は入ってくる。

・・・今もし見つかったら慧兄はびっくりするだろうか？

だって元カノが自分ではない男とキスしてるなんて・・・。

ま、振ったのは慧兄だしね。

「誰かいるのか・・・って・・・え?」

「・・・あ。”冬野”先生ですか。邪魔しないでくださいね・・・?」

私はにっこりと微笑む。

「大人なんだから・・・何をするかぐらいわかってるでしょう・・・?」

当然するつもりはない。
キス止まりで終わる。

でも私は嘘をつく。

「・・・っ。・・・・早く戻りなさい。」

一瞬息をのんだけど
すぐに先生の顔になる。

・・・つまんない。
焦らないし・・・何にも”慧眞”としての本音も言わない。

「・・・わかりました。」

無愛想に返事する。

でも心の中は真っ暗だった。

嘘の微笑みは私の仮面。（後書き）

妖艶な莉那さん（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6575z/

Seven　days

2012年1月14日16時52分発行